

特 12

11

八音圖  
胡蝶圖  
全



福老館梓



No 8998



坊間序

坊間の謄寫本よ八百屋阿七實記を稱する者尠なからしむるも其  
 實其虚確証する能はざ此編の如き實録中の尤實なる者にして信  
 と措よ足る者を取り網羅蒐輯せしなり抑阿七として方今文明の  
 盛世に遭遇せしめ壓制束縛を脱し自由結婚の説を唱へしめ情人  
 乃爲に其情を遂げ夫妻共白髪と榮え天年を全ふせんは惜むべし  
 刑法の峻なる火刑に處せらる嗚呼憐れまざるべけんや悲はざる  
 べけんや看客阿七が痴情を去て編者と俱に其靈を吊せよ

明治二十年一月

神民子誌す









胡蝶夢目錄

- ① 八百屋三代の興廢久兵衛が慾心禍災娘に及ぶ事
- ② 油屋武兵衛於七に戀慕して恩をわたへて娶んとする事
- ③ 武兵衛金を賄ひてお七を乞ふ久兵衛お七を嫁せんと約する事
- ④ 久兵衛賄ひを得て武兵衛に約せる事
- ⑤ 出火して家内吉祥院へ落行油屋惣兵衛途中狼藉の事
- ⑥ お七吉祥院吉三郎へ戀慕惡僧辨長文をひろひ武兵衛へ内通の事
- ⑦ 安井家の士利倉十内吉祥院へ至る武兵衛狼藉十内お七の事
- ⑧ 利倉十内吉三郎へ諫言を加へ母とお杉お七へ異見の事
- ⑨ 久兵衛お七を油屋へ嫁せんとするお七火を付めしとらるゝ事
- ⑩ 日盛上人お七が助命願ひ上人胡蝶の夢にて悟道を得る事

以上

八百屋 於七 胡蝶夢全

特 12 / 11

① 八百屋三代の興廢久兵衛が慾心禍災娘に及ぶの事

父の糟糠を喰ひ子は精饑お飽孫入還穂を拾ひは商人三代興廢の速をいゝり道里に江戸本郷のあたりより八百屋久兵衛といふ者あり起は葛西の土百姓なりしが本分老實漢めて耗種よりする賚物の蕪菁大根を脊に荷ひ八百八町に賣り弘め後にと擔負を店に移し場所々さどころに借店を藉り手一榮に採摘へ在所の村へと借し入爲入し四季の初産開端に紫蘇椒芽野蜀葵雞勝菜に土筆菜蔬菜蔓のら苜蓿に蒲公英春の一首の賣出たり夏之蒲子に諸瓜竹筴秋松茸よ芋茨菰小野苳歌つくし那に一箇だお没さも物なく店に飾りし七重八重次第に儲けし金銀に借屋を直に買ひもどめ八百八町を賣家とし積重たる八百八品是を八百屋と道ざらんや家主は這年六十五才臘日の能き人あれども三年而方中風の病手足の灘癒て便ねと調保は甚底の不足をなく任せぬその人の命遂に其年秋の野邊北郊の煙とまそこ成おけり跡は繼ぐ子久右衛門とて這年盛りの三十八才親に似ぬ子の鬼あらで生れの儘なる嬌養旅落の跼弛どのよて有無のとと裡等厠に任せ花は狂ひ酒を縦まにし柳巷花街を大路とし西よ遊び東よ走り遂に荒淫乱酒の爲に厚き病に掛りて既お死よ垂々せり久右衛門重き枕を擡け我女房よむかいていゝける人死るとさきと眞生にかへるとかや我れ慮らずに胡行孟浪の周旋を傲し生理を齒碁にし營生を顧みず老父艱難漸磨して儲たる蓄積を土の如く水のとくに耗費し家を滅し身を失ひ黄泉に至りもし爹々逢ふとあらむ何の申理かあらんや今我の痛悔



六 死しても目を閉ざるものは是なり我が死せしや今日も逼れり我れ多情あして幸せる子もなし  
 又家督の養子せんも家業が異なるれを因便旅設お至るまで兩三年も歴ぬへし其間おは資財轉  
 々滅損おて破落すへしよし又養子おても指頭する方おなければ冀望と家姐甚度兵介と再耦  
 なりて此家を繼興一柱よと兵介も召來せ涙も咽て托けるおど二人も拳局剪盛辭とるといへ  
 とも呀意なや立刻死し近し疾々と盃盃を山させ否容分説に婚酌させ歡適容して睡るがとく  
 死し逝けり話説這の兵介の河内の者にて十四にして江戸へ出八百屋久兵衛方へ小圃に來  
 り生質幹者おて手迹も能し習とすして算勘に慧く搬運拮据よく一ツとして要捷者なりしか  
 心只願愛撫して他お渡さず既に十四五年も隨從し當家も管家おも只一人の精勤ゆる親久  
 兵衛も當年お相應の妻をも呼び久右衛門の後述ともあさばやと思ひし間に病氣に懸りしを  
 久右衛門を能く知りて此場の譲りもなせしと見へたの妻向夫を重ぬるの恥あれども死期に  
 夫の宥して家の爲なれおとて自ら盃盃まで配としたるとなれを今更に辭固がたく遂に是よ  
 り夫婦とあり先久右衛門の遺言なれを是より久兵衛と名前を改め夫婦伉儷手足更錯拮据し  
 て素の資分も復起さんと辛勤節儉を要として日夜息するの日をおく万事中よく暮らせしお  
 其年の暮めでたふ一人の女子を産めり是なん八百屋お七とて後の世までの物のたり因果の  
 種お是非もあしされを量も限りありすも長死所あり尺も短き所あり兵介お久兵衛に仕ると  
 きと必らずすに長けれど久兵衛と成て家を繼く時は尺もまた短き所有けるにや元來兵介  
 久兵衛と生質才幹の有て健捷なる者なれとも天性吝嗇にして富貴に諂ふの情もあく内の生  
 過は牛の毛をむしりて虱をとり蚤の頭を割て二ツ用ふの如くされれば日々に寛思ある儲なと





八 彼に利を得れば是は損し何となく商賣も狭隘なりて賣家を早晩となく滅し心は日々に猥賤  
八 かり下きども利を貪ると峻奈ければ蜂の集る軒を避るが如く誰れ買ひ來る人をなく月日  
の過るは矢張りも速く右左する間にはや十五年に及べし有弊寒貧郎の一徳にや食ふべし切  
不足となければ風雨の禦ぎに忍びかたう那里這里と回議へとも我よりしたる蓄縮も亦  
外の人の賑濟くれる者もなく誠々窘迫届滞してまた如何とすへからす今もし這家を賣り  
商賣を止て之先々久兵衛殿への恩儀立せ又久右衛門殿と吾妻を我に娶らして家を譲らざら  
るの義理立す先向當分訖なきと女房の面下伉儷既に十五年の間尾鬣ある魚をも與へせ曠  
かましき一衣も着せず甚底の面目有て破落戸のとを告んやまた町中よも我を此家へ爰奴  
來り今若箇の東道と成りしと器量あるゆゑと稱せられし汚面と見世店を破却して人に笑  
はせんは體面の醜さを死に勝る恥辱なり我また死せんことは易けれども妻や娘の難儀を見  
捨て黄泉に至りてもし久兵衛殿や久右衛門殿に逢なむ何を以て分訖せんやと只願心猶豫し  
てさらに決せず夫智足らざれば偽り財足らざれば盗みすといへり惣て人の心と貪すれば  
必ら老しも乱る悲しひか久兵衛娘を花街に售んとにこわらねども万望富家に縁を求めて  
我の薄助にもすべし可憐風流の狂客もかき春情を以て挑しめんものと久兵衛が蓬心の起る  
るは悲い哉阿七が災ひを得るの基本あり

予十歳をのりの頃なりし古郷は篤芳尼といへる僧婆の有しが其齡九十四ありて幼女  
の頃より故ありて江戸にお育長し八百屋於七が行状を話説されしを小耳に聞て其尼のい  
へりけるを我は其日は旋室官事ありて見物に行ざりしが局中婢使の話説を述べれば於七

其日よ緋れさまと年齢は十六とはいへと十四五と見ゆる花娘子あり島郡内の振袖を着  
て背手お馬上に縛られたる風情さすが八百屋の娘なれを吉原深川の風流の治妖をなく  
又銀杏のお藤笠森れせんといへるほど風言おとあけれども柳腰と窈窕にしてさあが  
ら牡丹花の雨お悼めるが如く居る人行人口々にいまだ案慮おた小娘子外は御沙汰いな  
さそのかど袖を濡らさぬ人もなく森お聚る人々も驚破火を懸るお見るよりも皆一同お  
目を塞ぎ南無阿彌陀佛南無妙法蓮華經數千人の廻向の聲谷響の森お響く音淺ましかり  
しをなりと語れり心ある人は久兵衛を嫉み己の吝嗇深怨より一人娘を火にあぶる親も  
も鬼は有けり嫉まぬものとなかりしと聞けり後また尼が壯盛の時お吉三坊主とて江  
戸口々に濡佛を立てお七が罪業消滅の爲とて勸化して巡りし坊主あり這坊主は知りて  
居れり予が十歳をかりの時お聞置たるまゝ爰に奇説を擧て後人にしらしむ

○油屋武兵衛於七に戀慕して恩を與へて娶らんとする事

九 富て奢らぬとなく貧にして誦はぬとさし貧うして諸ふの猥賤は人を欺し賺して利を貪らん  
どの志に有りこの故に八百屋久兵衛と己れが吝嗇のゆるお譲りの家道も早晩とあて手窘今  
いはや若箇ともすへおらず先主人の義理といひ女房の面下世上の面體一時お身に逼り右お  
支へ左お支へせんとべあけれを本性貪惡の志を内に巧み娘於七を豪家の妾にせやらむや又  
は世間と嫁入の分おして遠く人しらぬ京大坂へも歸ばやと乖巧はしてあれとぞ卒忽お女房  
もも談がたえ又本性に願みれを願しきとにもあざれば少しと身に耻て竊に無念の牙  
を嚙とあれども遺漸なきことと思へり這里に上三丁目油屋武兵衛とて豪魁は油問屋あり



親父と去年の春死せられ内母一人あて兄弟とてもなく管家七八人を遣ひ家裡二十八餘も  
 追廻し日々繁昌の家なり富は敬わるゝあらいにて上下三丁目の間いづれ東道くを稱せり  
 這東道當廿二十四にして先東道去年存生の時縁組のと彼是と商談をありしものも逢ふと缺  
 け逢ぬと就らば遂其内に先東道と死去せられて干今無妻にして妾一人を置て當分の渴をう  
 やせり子に嬌之母のならひ矧や金銀は自由なり一日も速く嫁を呼ひかへた之諸々方々と聞  
 辨ひ既成就りて見合になれを断られ母も焦心て此うへと家族に之寄らす貧福にもよらず武  
 兵衛が氣お應えたるものあらと呼び迎ふべし調度支度と這方から爲へし手代其までも努力  
 して穿鑿し求べしと母御より仰出されしかば是僥倖と醜箱代の物兵衛といふ者武兵衛に臨  
 從して西に走り東に走りて倭ひ賄賂貪らんとを巧めり武兵衛もまた白小賊の盜する如く娘  
 子の自家くを垣見してぞ廻れり然るに四丁目の八百屋の娘を聞出し一望見まほしと一日  
 其戸前へ徘徊して躊躇せり久兵衛と三丁の東道のとあれば見店の内へり疎腕挨拶すれを含  
 笑して會釋し通れり翌の日またもや來りて踟躕しうを久兵衛趨り向へ些御凭下さるべしと  
 塵を拂へを愕然として店頭に倚り上野御寺方へ獻上の椎茸五十斤をかり買得たし佳品の蓄  
 へりらば見せ給へ不遺買取べし久兵衛跪まり頗る蓄へあり御覽に備ふべし熱開店中なれど  
 之醜態をいとぞ先御上り下さるべし娘子哩於七哩御茶持來といふつゝ土藏へ椎茸を取  
 しあ入れり願てお七と茶を携へ御茶一ツ進上せんと捧出す茶盃を取る内も顔見らるゝの恥  
 かしさに茶盃さし置死其儘に翻々として内に入らぬ一飲の茶と咽を潤とと甘露の如く覺へ  
 今一ツ乞ひ求んものどもふ處へ久兵衛は椎茸携へ御待遠あらんとを謝し椎茸のしあぐ

さし並べ彼是とすゝむれとや恍々惚々として心遣に椎茸あわらずいづれ椎茸と善にも惠ま  
 らも皆買求べし椎茸のみあわらず山を川も買求むべし以後這方の宅へも出入致さるべし又諸  
 用事もわらぬ竊にいゝ聞されよ三十五十等の金子の儼と表面手代共お斟酌に及むず何時に  
 も中越よなといと懇切ある頼爲涙をながし有難あり自眞と私しも近年と多風雨にてサ  
 左様お聞たり當日全家ははくなく箇人ぞ僅お妻と娘と下婢一人のみ休怪奇造化は車の輪  
 の如く運が來れを左様なるものあわらず誰か一人負荷して鼎力なるものあわらず切の勞す  
 るとあらず令愛と春齒幾年ぞ曰く未だ二八に及むず翫要あしめて朝暮母の嬌養に長せり否  
 々鮮妍たる一箇の好娘子なり愛すべし愛すべし愛すべしより娘子の美麗に頼りて父母また富  
 貴を得るまど證すやならす頼て良婿殿を得て御夫婦を逢暮とへの樂みをも傲せしなど  
 云て歸れり久兵衛茫然として何の縁由をしらぬ熱々三思するに這就ち假娘子を戀牽する  
 の結構ならん此上もなき造化もとや金坑を得たり何にも爲よ娘を縛けんものと深く妻にも  
 隠し獨笑して後の禍いを招けり

◎油屋武兵衛金を賄ふて於七を乞ふ久兵衛於七を嫁せんと約する事

人の相に善惡の九相ありて争奇と爲べからざるものも稟得たる所の生質をまたいかん  
 どをすべのらすたとへ惡相の相ありとも常に慎んで敵を守り人と交りて能く和し能く譲ら  
 ば人誰か惡んや常にわれを縦放する時は生質の惡相しきりに現れて爲る所就す所内外あ  
 出て人あ思み避らるゝに至るしかれども自己は其邪まなるとをしらぬ何んぞあれを我々の  
 出て外に制するものなき故あり土豪富有の人の家の子に有ものあり油屋武兵衛と原より富



有る生れ飽食煙衣より育ちたる者なれば人表も能く春高く膚白にして面赤も具足し常に上田  
 八丈結城紬といふ處にして男自負の多有惚にして誇然として賽を張り嘘をつき酒を縦ま  
 ふし色に乱れ青樓花街を徘徊して粹を辨玄通を論じ妓婦を詰り鴉母を屈らせ青鳥を弄り  
 酒を喧嘩をし出し那一箇として愛せしむ所なく此故に春城遊廓に至れども人に思ふこと  
 仇誓の如し乏のれども金銜惡馬を駐め金鑄とく堅を射る奈せん財用の盡ざる醜しといへど  
 も又争奈とも爲べのらず酒家青樓の服を穿る處なり此故に益々威色を振ひ六國と猶我が麾下  
 にありと贅し人の色を碍げ口舌を咬け人を誘り人を嘲り縦脱に遊里を横行せり後には武兵  
 衛に至る所の青樓へ人皆行とを止めたりしのを青樓を又門を閉て痴人を忌が如くせり鐘  
 を室中に撃ば其音四方に響く誰いふとなく油屋武兵衛と刀狩不行の者ありと人避て交るも  
 のなく況や縁を結び婿をもとむるものあらんや此ゆゑに八百屋の娘に婿を求めんと計較たる  
 ものなひ油屋武兵衛は兩三日と八百屋へも來らざりしが此日遊興の歸りてて手代惣兵衛と  
 其本店頭に來り暫ら之腰かけ茶を乞ひ烟草兩三管を吹き恍惚と娘の風姿を眺て左右とれど  
 も久兵衛も出されを不興して去らんとすれど女房會釋して今日は折柄しと久兵衛は他行な  
 れば再度御出もかかと立送り歸しけり武兵衛は別に側町の行戸に入り酒を出させ一面蓋を  
 壓して惣兵衛を見ずや娘子の風姿木綿の兩翼と雖も翫々として細腰また柳の如し艶  
 顔鮮妍として楊蛾咲を含む誠に今時の風流千金買あり我是を得んとするお橋なし汝我爲  
 り求め得たらば白銀百兩を與へし萬望汝が才奇をもつて我を娶しめんやいなや惣兵衛蓋  
 を傍にさし置き且笑つていふ東道何ぞ其ように憶し給へるやの娘をして妾に做んとさへ

別に難さどあすとなし短んやかゝる豪富の奥室に迎へ給へんと那剛が僥倖怎麼是に過たる  
 とあらんや只今久兵衛を這里へ招き寄直もらひ獲て東道に獻じ奉つるべしと言語巧に言  
 ましらへけるにぞ武兵衛と惣兵衛が言の速かあるを悦んで竟み私宅へ立歸りける久兵衛他  
 田の去來がけ油屋の手代惣兵衛を行逢けるにぞ折よしと惣兵衛久兵衛を引て直様行所へ至  
 りまづ酒肴をもて久兵衛に薦め惣兵衛いゝけると先日より此方の東道慈父の所へ參られ  
 馴染みせられしよし夫に付怎麼とみや此方の東道娘御れ七どのを分外氣に入萬望もらひ  
 謂度どの思召し入知得了とどく此方の東道今にさだまる内室もあし是迄も先老爺去年急な  
 る御病死にてかく遅々せり勿論どのようなる豪家又と武家方のお娘御那這より養子分あし  
 てせらひ受ると諸方々りも申納れあれ共母御を武兵衛様も分外器量好みひまふの貧など却  
 つて心易くして萬事よとしとの慮外ながらかよふ申せを些失禮ながら慈父の爲あまづ  
 福徳の三年めとやら申もの疾歸られて御内室も悦ばしめ給へお七どのも春花の娘子男と  
 ぐし有財幾刻を極て早く應報せられよと偃蹇撞て言けるにぞ久兵衛も心悪き分説とはおも  
 へども胸裏計較事されば今さら止すべきにもあらで轉々の御補助尙御看願のはとよろしく  
 願ひ參らするありとひたそら諂諛ひ速蚤と八分にと就たりと大に悦び足をこやめて我宅へ  
 立歸りけるにぞ家内もの何やらん逸興氣ふ打擧てはなし居けるに久兵衛最も善首尾なり  
 と猶も蹊蹊を窺ひ居たりしに婢女の杉打笑ひていふそもや世には邪忌な男も儘有が中にそ  
 那の油屋武兵衛とやらいふ人色も白し男もよしことおかふとの難をなけれど肺臓からいや  
 な騷設容頃日から三四度も來わつてお七様を穴のあくはと邪忌目つとををして眺めて居まし



四十

たゞ若油屋の嫁御にても貰ふといふてさんじたら七様あまたとふささるへと尋ける久兵衛は這ぞ大事と猶を耳を澄して立聞居けるがお七のゆふたどへ千貫萬貫の豪富でも氣の普ぬ所へ配とは忌又何程貧ふくらしてもたがひよこる潔々夫の心の信やあることを願としからせやどりわけ那の油屋の武兵衛醜面親るとさへ邪忌しいと立聞久兵衛胸算さつはり齟齬を猶を心をとり直し娘かく武兵衛をいへ忌嫌へともし先祖の遺蹟立がたき時は其身を苦界に沈めんを時の薄命ならん是非もあきとあらすやとさへあるよ今油屋の御聞嫁様と呼れんと何の不足か是あらんや嗜不嗜やいふと必竟自己が縦恣主人のため親の爲難し証して遣んものと只管氣を苛ち胸の火を消す水もなく火お火をそへて一人娘のお七をば了に罪人と做せしぞ因果とゆふをわろのあり

④久兵衛賄金を得て武兵衛に納する事

富て奢らぬとなく貧しくして諸はぬもなし久兵衛と萬望娘を油屋へ配し紫の資給にして主人二個の義理をたてたしと區々心を費いけるといへども夜來の光景にては中々得心を做せま右やせん左やとおもひ煩ひける中油屋の手代惣兵衛入來りけるもへ家内の聞んとを怕れまづ二階へ誘ひ茶煙草を薦め久兵衛只願身を屈して惣兵衛に詣り居けるが惣兵衛懐中より附金三十片をとり出し近日結納を參らすべけれどもまづ夫迄の雑費の費用を有べけれを我等が寸志よて東道より送られ侍る所なり若不足の義もあらむ復々申越るべしと昂然としてさそ無禮に申述べれば久兵衛は金と見るより雀躍身を轉けてかじ蹴き未だ婚配も半ならずるに數十片金玉謝するよ言葉なしし妻儀折悪く不快にて打臥し居候へば近日得與申さ

五十

かせ渠等もも悦ばせ申べし否の義は萬事よろしく御回謫憑入る所なりと言巧へけるに惣兵衛も安堵のていにて此上疎略の義と有まざけれども一日を速く回詞せられよと言葉のまして飯りける此曉暎を妻とお七いかさまにも且訝しく障子蔭より立聞して妻と娘も大ひにおどろき扱えそ一人の娘子を牲へあして金を得んといふ夫あがらも淺猿の心やと泣入お七を宥めすかし必らず氣づかふとにあらす逆もあの通り卅兩の金までとるくらいのと今さら忌といふたりとてよとや遣すにとおくまじければ今宵筋に這の家を立退葛西は先久右衛門どのと所縁もわれををを恐みて此難を脱れ油屋へ之行ぬよふに母がよとく策るべければ必らず深く歎くべのらとと家常の物なを治行し徐々逃山となしけるお主人久兵衛其形振をはや知りたるにや夫ととなしに杉を呼彌介を呼ひ今宵と何とやら心澄がたき夜なり南斗低ぬうち門戸も裏面も閉て兼上儼門へ出るものあらむ我に告しらせよと妻娘もさけかしに喚りく其身も聴て臥寓に入れい夫火盛んなれば水を燥し水盛んなれば又よく火を消す水火半刻もなくととあらざる物なれ共亢るときは災ひを生ず既にその夜を丑満頃母と娘と宵よりの憂愁みお夜も寐られせ耽々として睡眠中庶の軒に火もへ出で折しも夜風の烈しくしてばつと燃たつ程こそわれそりや火事よと噪ぎたれ母は娘の手を引て倒々轉々逃出る久兵衛と一心不乱金を切と腹にまきいめ大音にて妻子を呼たて疾走よ疾出よと喚りく其身は直に佛間に飛入祖師様を引抱へ帳面を手に提て表の方へ逃出る杉一人へ甲斐く敷内義とお七を先へにがし我身と跡に残りて簞笥をわけ小袖七八ッ褰袂ながら脊に負世子を慕ふて駈出る彌介と強力手に當るを幸いにむせうあ働き荒廻る早四方に火廻り八九軒の延焼



なれども皆々手強救火のへ早速に鎮りはしたれども久兵衛は只塵灰もなき丸焼殊更火詭の  
 とあれば町内宿老の結正めて一先菩提所へ落行追々の御沙汰を待給へど内意よくつて久  
 兵衛と吉祥院へ急ぎけり此時油屋武兵衛と久兵衛が丸焼より親子零々迷ひ出たりと聞  
 き筋に惣兵衛に耳語死はやく尋ね探して引とらへ那粗の粗房へなりとも情をかけて入置べ  
 し我跡よの至りて母に之金を與へ幸ひに娘を諄落し我他年の念ひをとらすべし此舉止にて  
 は定て嫁入をはてし有まじもし母親他の巨碍等あらを威して成共はるべし然而久兵衛  
 夫婦のものへおもふまゝに普請として安慰よ仕込つかわし赤心渠等の十分ならずや必老失  
 落を倣果下よと自己外袍手早く脱て與を惣兵衛大にいさり出し斯有がたしと尻ひつ捲げ  
 跳がおどく走りゆき那里這里尋探しけるに漸々ど見當り夫と見るより惣兵衛小腰を屈め  
 會釋して扱々今宵は存じ懸なき急變さぞかし畏難察し入處ない就てと斯御家内打連を何所  
 へかほこしゆぞや主人武兵衛中属候は幸ひ此方邊に潔索ある粗房もあれを誘引申べしと  
 云属たれをまづく此邊へ御入下さるべしと俄然惣兵衛呆丁單母と會釋し御しんもトの情  
 有のたぐはどんじますれど久兵衛も不慮の變あて今晚菩提寺吉祥院へ落るまゝ私しどもは  
 直様お寺へ参りませぬを家内もあんどしまするゆへ武兵衛様へとよろしく禮申下さるべ  
 しと云けるにぞ左様ならば御内義と右も左にお七とのと此頃久兵衛とのへ附妻にや受置た  
 れを是非此方へは遙與し有べしと已に狼藉に之及ぶべき跡あれば事ひづかしと娘と共に逃  
 出せばそふいさせと擁止るを彌介と大に忍りをあらわし惣兵衛が首頸擲て擲の之れを惣  
 兵衛とぞと威しれ脇ざし彌介と無手にてあしらひのね其間に母と辻番所へ馳入りは覽の

おとく女斗りの途中にて狼藉ものに出合畏難いたし候わかれは援下ささかしといへけるに  
 ぞよりや打殺せと一勢に長棒引提追取巻を斯は協じと惣兵衛と逸足たして逃去けり  
 ⑤ 出火して家内吉祥院へ落行油屋惣兵衛途中狼藉の事  
 財と善人を活し又善人を害す人皆財の人を活すとを知つて人を害とるをしらす老子お曰  
 く慾多ければ身を滅し財多ければ明を蔽ふと久兵衛今曉菩提寺吉祥院へ落來り上人へ委細  
 を懇しに早速承允しと敢先酒飯を進め一寐入して氣を鎮べしと別房に臥しめけるに未  
 だ妻子の行衛も知れされば心と離々小煩煩 怎麼まれ箇も造化低の風來るかちと悲嘆のち  
 みだ更お不止了今とはや只焼益丁脱得赤條々お成たれば且暮の薪烟を立がたしといよく  
 惣兵衛又請取し此三十兩の金を資とせされを今さら詮すべなし何分妻に商議すべしと益々  
 慾念いやまし其日も卯の時頃に至り妻娘お杉彌助諸共に漸く御寺に尋ね來りし久兵衛悦  
 び頓て上人も出迎ひ給ひ今曉の變火途中恙なく來りしと悦ぶと限なし妻子と吻と吐息つき  
 今朝程漂迷來る路條にて油屋惣兵衛追來り其邊の粗房へ住置べしと武兵衛より申屬たれを  
 ゆるく御入り下さるべしなどいろく言まわしそれども何とやら氣味わるく斷りいふて  
 退れ去らんとなしけるに惣兵衛敦圍して左わらを娘御一人と留置るべしとお七を引立ゆか  
 んとせしを彌介執て擲除けれを惣兵衛大に怒りを現し其儘脇ざしを抜て切て懸りしが彌介  
 と無手あり是非なく殿方の御郎かはえらね共女子計の途中の難儀御慈悲お御救ひ下された  
 して憑けるお辻番の侍心得たりと長棍をこつて捕圍けるおぞ協わじとやれもひけん逸足出  
 して遁失けり今曉の火事といは惣兵衛の狼藉と申信に心も億ならず借主か主なれば家來



までの悪黨の辛ふじて此御寺迄脱れ来りしなりと涙と共お物がたるおど又もや思案阻礙  
 黙して一ばしと言葉もなくかゝる所へ油屋武兵衛いと爽やかに出立一僕も提盒の袱を取せ  
 せ玄關より入来きば倉略こそ又油屋と母と娘と一問へ遁入隠れけるにぞ武兵衛も縦容とし  
 て入来りまど上人へ會釋し且久兵衛に打面ひていふ夜來を不慮の變難は居宅も残らず焼失  
 嘸かし御當惑察し入處なりしかしまづく別に御打撲もこれなき蹀躞大悦至極せり上人様  
 あも大勢の御厄介猶此上よろしと憑存するなごやお七が聲のいたる按捺よて疎意なき体  
 に會釋けるにぞ久兵衛も敬しく禮を返し御懇情ももさつそくの御諷諭何はどの忝けなし  
 と只願詣ねり面談けるよど武兵衛かさねて今曉眉お火の付たる如く變火おては内實娘はな  
 どは周章の上定ては空腹にぞいべし暫時の間は休息もなさるゝ様よと存じ手代惣兵衛に申  
 屬しよ那廂原來の痴呆ものゆるは内實は娘子など驚かせ申せしよし偕し失禮よろしくは詫  
 玉るべし莫説此般の燒失は心勞とえ申ながら何の少し計りのとは家業之高のしれたる青菌  
 盡焼に成たるとて高が大根蕪又家土藏逆も三四貫目の估價少しもは心勞に及ばせ則ち普請  
 料二百金は合力申候は請取下さるべし此末どもは夫婦は安樂に暗させ申べし偕此提盒を  
 見舞のしるし迄お参らするゝまたく一兩日中に尋申べしと立歸れを久兵衛とひたすら  
 武兵衛に面談ひ跳おなりて見送りさも嬉し氣お見へけり夫失火して雨を喜ぶとい忍人のた  
 とへ此久兵衛のとなるべし上人熟と久兵衛が悦ぶ躰を見て嗚呼猥賤の心なるやと打觀じ  
 て居られしが上人夫婦のそのに宣ひけるとひりし唐の那某といへる人あり二人ともは眞卒  
 朴直の人にて園畦作りて渡世とせしお或時畦の中より一ツの瓶を得たり開きて見れを光

たる黄金なりしお妻と大に悦んで是天の寶の之と取らんとせしに夫のいとく天よく物を生  
 きといへども播植ぬものを生せず今我力作せず種播せして空く金を得ると不祥なり今我が  
 二人の的力作して喰へば餓るまどもなま寒ゆるともなく日として足らざるとおし箇程の實  
 有ながら那ぞ不祥の金を得んやとて本の所へ埋たりと聞隣なる人は是をとらんとさまく尋  
 ね捜せども一物もなしと其後の夫婦の人次第お稔を得て富貴おありしとあり今足下を又  
 由縁なき人の財を得て家を復起せんとするは畦の金を得る人の如し我又熟く武兵衛が蹀躞  
 を見るに太だ凶惡の相あり必らお禍害出來るべし甚底由縁もなき人に金銀許多を與ふると  
 究て深死望の有ゆへ成べし若其望み叶ひあを幸いあるべし叶わざる時は其金を得たるほど  
 の禍害免れぞ了にと細目の愧めを蒙り其時千悔傲といへどを及ぶまど黜と承まさればお七  
 を武兵衛へ送らんとめさるゝと若娘氣お武兵衛を忌嫌ふ狡屈たる心より奈何成誤謬を仕  
 出さんぞとかりがたし其時彼刀狡等が豈二百兩の金を棄んや赤裸おしても取らずお置ま  
 ぞ能く思惟し給へかして曲折戒め玉ひけるお女房も涙を流しいと難有き上人の戒教のな  
 と悦ぶと限あし久兵衛も今更會得の様に見ゆれどは何分油屋が二百三十兩に巻纏萬望閨女  
 れ七を誑し賤し淳浴して武兵衛に送らんと罪業も報も忘れとて面を僻てひたすら耳を  
 聳して聞居たり

⑥お七吉祥院吉三郎に懇慕惡僧辨長文をむらい武兵衛へ内通の事  
 却説久兵衛と本郷の譜請お取付晝夜とあく急ぎけるはどよ過半修理も出來悦ぶと限なし茲  
 お當院内に吉三郎といふて漢の彌子瑕和朝の業平と叫傲美少年有り江州安井源次兵衛とい



へる人の二男なりしが此源次兵衛日蓮經宗信仰ものよしして二人の子あり兄を家督とし弟は出家すべしとの願なりしか共家室並に諸親類も打集り許多生なせる子ありあらずとしをれ鏡の同胞的此件ハツ延引然るべしと諫れども曾て聞了あし俗諺ハ一子沙門に入れを九族天孫生ず如筒の大功德に甚底不足のあらんと竟お江戸駒込吉祥院日峯上人へ懇み出家すべしと登らせ置たりされを上人も吉三が伶俐よめで玉ひて只管教戒玉ひしによく師の道を守り適れ後は善出家にもあらんものと末頼をしくどおがされけりされば八百屋久兵衛家内は不圖も火變り出あひ吉祥院も身をせせ譜請成就まではとくらし居けるがいつしの久兵衛家内のもの此吉三郎と親しみ分説聞娘お七を吉三が優に訪ある風姿は憶淨洋おりにふきて言葉戯めて挑むといへども吉三郎と素來出家の望をあれを女に心撥すべうもなごされを春風誘ふて楊柳動くの謔言若木あらぬ身のおと悪からめ或時吉三獨り書院に茶を挽居たりけるにたいさへ寺の物さびし死に寂々として眼を催し居たりけるがお七此光景を觀るに蓋世にと珍らしき人も有つるもれかな紅粉をのらすして自然の顔色わいと不思も吉三が艶を打眺め恍惚として有けるが婢女の杉へ何心あて來かより此蹠蹠を見て倍は幸ひ人目もあし兼てはお七様の戀慕ひ玉ふお方を媒酌せばやとそとさし足してお七が負を踏どうてをれ七とはつと打驚きこは恐し誰的あるやといふに吉三も目を覺し三人顔を面對して莞爾と盛へを杉とひつしりね七が手を引き吉三が傍へれしやられねもわ吉三に行當きは杉の甚底をするや吉三様は妾おとさの醜婦を那や相人おとなし給ふべき深く言のわし給ふお方のおわしぬるとをしらすやのく戯れたるとをかの此方のしらし給はゞさだめて頼お角

し給ふべしお吉三を吃としり目お睨睨て言詐らへけるにぞ吉三と總て満面を朱めことけしうらぬ言を宣ふものかお嬌婦こそ油屋の何某と深く言のわし給ふよ非ずや儂等とさの桑門は何の言かわせし婦人あらんやなぞたがいお言葉挑みけるはきに杉といと干氣がり花は嵐月にひら雲吉三様もよいらげん萬づは杉に任せ給へと一問へ二人をおしやりく我身も何とかえの寒く勝手のかたを窺ひ居けりお七といと身も揮ひ物言とさへ覺急なく顔もわからぬ薄紅梅いとほちらひて見へければ吉三とね七に打やかい嬌婦の誠篤怎やわたにこおもひ参らすべきささきと儂を沙門に入ぬる身ありせば若安りのましまさとの有てと師の坊へ面し破戒の罪を怎麼にせん嬌婦も復頃日の風話おと油屋何某の方へ嫁属給ふと死くさればこれ二人ながら新罪を犯せるにあらず素來我等とさの土部的お騙され給ふさどはさだめて當坐の戯れならんさるにもあさのし説お死人の唇齒又恐るべきにあらずや善々察し給へやと打着めけるにぞお七は言句の唯へさへなく落ぬる涙とらへとせく不止し何とかれもひけん忽地軀を跳らして庭に井戸へ飛入らんとお七は吉三といお慌忙おし留め其故を索ねけるよ逆も妾が願ひの協とさる時とかくあらんことと兼てのかくお郎の白情と妾が科にしてさらし郎の過あわらぬ只管放ちて死しめ玉へと争ひけるにぞ吉三も今と鐵石の念もくだお七が心の切なるを甚低や儂耳若木ならん若這の現れなを嬌婦の今死るをを必らず我と一所に死出の田長となし給へとね七を引寄せ抱きしめ儲ころとるな死あしとなり後の世までも唄はれぬると是非をさき光景あり茲に當院の髻頭に辨長といへる醜頭陀あり叢め吉三が男色も慕悦いろく口説けるといへども却て慚辱められ望外の光陰



を送りける中又もや八百や家内の出来るお七が色香に迷ひ臭きもの身しらすと或ひと抱付しなだれ属只管戯れけるにぞ婢女の杉にしたゝか耻しめられ是を叶はず彼も爲ら老痴呆れ一てつ折を親ひ居たりしが吉三とお七が蹠蹠を竊かお探り出し寔にこれぞ究竟のとなりと油屋武兵衛おどり入て吉三とお七があるなし言を告しらせけるにぞ只さへ邪智ふかき武兵衛主従此蹠蹠を打きゝて大いお憤はり倍と是迄お七めと右や左と言延せしも必の吉三めの有也へおのれ今におもひしらせんものと辨長とまめし合せ猶をよふすを親ひ居けるなり

⑦安井家の士利倉十内吉祥院へ至る武兵衛狼藉十内に撃る事

却説吉三郎は久兵衛の閨女お七が戀情棄つたえとや此身も後と桑門もなしぬる軀なれを墨の衣お容姿をかへなばお七も又その上お慕ひてがるゝと有べからせと思惟し佐假令の戀中ありしが雨の夜雪の旦のくひくの數つもりて今と殆と言交しぬる言の齒唇つきしなく殊更お七は油屋へ嫁入するとの風説高ければ心よらぬとおおもひ或は僻言或とうらみ又お七と吉三が心を密に狐疑古郷の雛兒よめでさせ玉ひて妾と疎く款待玉ふちをたのいお憶ひ餘りて后と閨房の私語ととなりぬの切あく戀愛あれと甚低となく衆目の關ふうたわれけるにぞ上人風便にさこしめし玉ひよりく暗お吉三郎へ教化做玉ひけるとあり茲に江州高嶋家の執太夫安井源次兵衛二人の男子兄源次郎は嫡子あれば家督の名跡又弟吉三郎は二男なれば父源次兵衛の望にうつて出家成しめんと駒込吉祥院へ託し遣しけるが怎麼量らん兄源次郎假令の疾は臥ける頃日了にはかなと成果けるよぞ源次兵衛他家より嗣子を

求んと商議なしけるといへども母と深くも這を歎き萬望弟吉三郎をとり戻し家督相續なとしめんと種々歎き悲しみけるお七を親族も打集りて此義は甚低と吉三郎を呼戻すことしかじと茲おおるて源次兵衛終お這議に同じ家の臣利倉十内をして江戸駒込吉祥院へ遣し兄源次郎相果候に付名跡相續致させたくこれによつて還頃自由がましく候へ共右申上るごとく安井家相續の義は座候へば甚座吉三郎は暇の義よろしく聞了願ひ參らすと且些少の至りおから別幅の通り進獻仕まつる所と色々音物ならびに方金千疋をしてさし出しけるにぞ原來無慾原慾の日峯上人まづ一應十内に會釋の言葉丁且別幅の音を辭して宣ひけるは安井氏の使節事新しき事を仰いものな抑々父源次兵衛どの吉三郎をして當院へ憑み越され玉ひしと假令ならぬ佛縁をばしめし分られてのとあらずやされを吉三郎おかざりてと他境の弟子のよふにせおもひ侍らば頃日既に學問を長經釋讀誦を出精のをちと遷きに必らず剃髪なさしめんとおもひおたりし所あれば吉三郎を返し申さんと努々應ひひまじと言まき玉ひけるにぞ十内猶も身を逃たりて申けるは上人の立腹重々の尤と去あから嫡子源次郎息才よて其うへにも吉三郎をとり戻さんと爲を御憤はりも有べきとづ如何せん家相續なりのたきお付は願ひ申上るとなり強て此儀は聞届け下されたしと頼けるにぞ上人又宣ひけると兄弟供する時は出家なさしめたらぬ時ととり戻さんとと太尤其意得がたし武家と貴くして佛家と尊からずや何ふん這義とは歸りありてとろしくやさるべしと宣ひけるよぞ十内もたらをたて此上は是非もなし上人は遮與なく心某し偷出してもつれ歸らんとたがいに闘争止ざりしが卒遽に院内諫動して和尚も十内を自己の闘争をやめてまづ勝手へ到



り見れば油屋武兵衛手代將兵衛を引連其外狡徒漢子どもなむ來り武兵衛まづお七の方より  
 吉三へ送りぬる文を懷中よりとり出しその儘吉三郎が警りを引抓み喚叫罵りていふ若冠狗  
 偷々くも我等が女房れ七を姦婦ひろき我晴目を掠し々か間夫の罪く五刑の中最も重し若冠  
 の如き邪曲艶冠髪已來の見せしめあれを廳所へつれ行逆身着お行とせんと自ら拳を固めて  
 撃と三四十内這光景を見て跳隔て武兵衛小對していふ其許の立腹のさるとかから必究其  
 元の内政の不埒より起ると某しも遠方より唯今漸之罷りこしたるとなれを深き蹠蹠を委  
 曲存じぬとねども内義より吉三郎様へ送りし文とやらそれの屹としたる證據とも做がた  
 した内義より吉三郎様へ送りし文ばかりおては全く之を片便にして二人よりとりかてせし  
 證據あくてと罪におとしのたし其上其許お血で血を洗ふ恥あらせやよく考便仕玉へ  
 かしとをし留めけるにぞ武兵衛惣兵衛猶やいり出し惡僧辨長を呼出していふ過刻よりい  
 つくのれ待士あとしらねせかけもかまぬ世話適頃御苦勞あり左はとせふこが見た  
 尤此的御尋いへといふより早く辨長進み出既口を發かんと爲けるに八百屋の下女杉れ  
 七が遣ひ來かより此躰を見て折あしければ小影に立彷徨て有けるが武兵衛が縦恣辨長が  
 邪計耐のねて跳出で十内が前へ手をつらへ婢女は八百屋久兵衛が下女杉と申ものにておさ  
 んが手まへの娘は七様はいまだいづらたへも縁属の義と定まり不申最もこれなる武兵衛  
 様と度々の御所望のよしなれども七様には中々武兵衛の所へもくと扱れき面貌觀ると  
 さへ邪忌々し又たとへどのよふあよみ出世になるといふても脇へ嫁入と忌どのとまして那  
 武兵衛の所へゆくゑんとつくないととなれば七様は武兵衛の嫁でも女房でも近付

でも奈でもおさりませぬ夫もとたどへ吉三様と戀愛があるあした處の奈にも武兵衛の構は  
 ぬと吝氣するなら女房にもつてからしたがいと理の當然を演若れば杉が詞耐へかねた  
 る武兵衛が我慢醜女肥の切れ過たる鄙賤婢女目にも見んと跳菴るを透さず十内杉をりこ  
 ひ刀の鏢にて武兵衛の額をはつしと撃こは假藉と惣兵衛辨長左右より打てのめる心得た  
 りと左足の速業三人均しく打のめらし刀を引拔さんぐに擊懲し汝等抑々此吉三郎を怎的  
 と思しぞ荷くと江州高島家の家老安井源次兵衛が息男汝等おどきの土郎夫として無躰の打  
 擲生命しらすの穀虫めね七を己が女房ありと偽る耳ならず長そでの寺を見込傍若無人のふ  
 るまい身動き做ば首と胴との生別れと鬼神も挫しぐべき勢ひよ武兵衛主従は伏たるまゝ身  
 動さもせず打倒れ居けるが上人座を立玉ひて辨長を引起し汝生疾中々出家を做べき者に  
 あらせ今より長く師弟の縁を絶ぬるまゝ勝手次第お還俗して恣まゝに悪事を做よと皆筋抓  
 んで門外へ突出し又武兵衛主従を扶け起し玉ひ其元の惡心より直さずんを後必らず禍害わ  
 るべしし此回は十内どのに詫言して助參らすべし後々をきつと嗜み玉へとこれも同トと門  
 外へ突出しけるよぞ武兵衛と骨々碎るおどくなれ共我慢のへらす口罵りちらして立歸る

⑧利倉十内吉三郎へ諫言を加へ母とお杉お七へ異見の事

日峯上人と過刻より寺中謀動世間の聞へを憚り玉ひ只管心煩なし居らさけるの十内が一  
 擧の働さとかつ杉が頓智のあす處にて武兵衛主従の逃去りけるといへ共只納らぬものと吉  
 三郎とお七が身の上上人まづ十内吉三郎の兩人を房裏へ招きて宣ひけると武兵衛が一事の  
 放蕩によつて不慮もお七吉三郎が譏の現れぬれば是非なく明一語り候とん過去頃八百や久



兵衛失火のつぎ當院へ落來りしが縁の元となり八百や家内逗留の中甚麼そこら方當睡臥  
 といひ痴痴契約を出來たようす愚僧を見込んで頼みこされし源次兵衛どの、手まへ奈奥道  
 説有べきとより、意見も加ふまどお七が退ねをこちらもその氣次第に暮る水の出端ア、  
 呆ちとや武兵衛金の借在りあらば是非お七と油屋へゆかずば成まいとふ成とよちらの方よ  
 りお七と生てえいぬどの蹠蹠邂逅出家の軀お生を佛經讀誦と做すしてお七吉三が身の上を  
 日夜わんど煩ひて心の安き閑もなし那の勃海お比翼魚有行ときは唯雄相ならんで泳ぎ則ち  
 人に獲るゝ時は必らず共に死を同らす又湖水に鴛鴦といへる鳥あり雄死する時雌その尸ね  
 を抱て日を経して共死せるとあり畜類鳥類さへ愛慾深けれをかくのごとくあらざや今  
 朝十内どの、國元より其方を迎へ見へし時のその嬉しさ早速手渡し申さんとはお七をひしか  
 よく、三思を逃らせればひよつと結隔若氣の無分別から世間有格を心中なせまいかと  
 態と心おもわらぬとを聞ひしは其方よ誤ちな死よふとの師匠の情お七がとはふつ、お七  
 ひさつて國元へ歸つて親の家督相續師匠への孝親への孝君への忠義お七獨さへ棄れば三方  
 四方は皆納るむくつけな出家形氣と必ぞ恨んで吳那哩と未來を曉す御身に師弟の恩義棄  
 めたく御衣をぞひたしける十内と最前より上人の御教化に胸もはりさく難有涙吉三郎と何  
 思ひけん到添抜て誓りの中をふつ、りをし切又振袖の袖も同玄くおし切て下お置今更未練  
 がましく候得共退に退れぬ義理と義理なれ共上人様の親より篤き御心配且十内が精んれ  
 七がとを思ひ切し証據は此黒髪、絹の片そで我一生の遺物とも見々かしと必らずお七へ御  
 渡し下さるべし逢ふては却て涙の種いさや這より立歸らんと口よは言と立かぬる上人涙を

はらむ玉ひ潔白く、自ら旅の用意まで御心属給ひしが十内の唯上人をふし拜み凡慮なら  
 ぬ師の御恩名残はこれいつまでの盡しがたしと泣入吉三を種々に諫いさめて立歸るお杉と  
 けふの騒動と吉三郎の國許より十内がひのいお來りしととも委しく談話且吉三郎よりお七  
 がもとへ送りし文をさし出まけるにぞお七はうれしくとる間をおそしとひらき見て這をも  
 甚低せん上人の段々の深死御情け十内が忠義の心盡し親の爲先祖の爲大恩ある師の御坊の  
 御教化に従ひ今宵中お當地發足するゆへにそきたは随分息才で油屋へ嫁入し双親の心を安  
 め又もや御ゑんもあらばゆる、御目にあらるべし定めてこれまでやかかせしとの葉も皆  
 もてあだし事となりぬるととくれ、も約束事と御あきらめ下され候どの文句今宵を過し  
 なば吉三郎様必らず古郷へ御歸り有らんと疑ひなし怎れお傲と今一度逢ひ参らせいでい  
 妾一心総て忍びがたしと唯怪けに狂へるが如く眼逆立喘息して表面の方へ駈出んとしけ  
 るを杉と驚きを止了ども應とす這光景も母も共々跳隔て多方賺し宥め母密に吉祥院へ人  
 を走しめ吉三郎のいまだ二三日も逗留のよし此方へ御申しこし下されたし娘お七へ、う狂  
 氣のおどく今宵中おお寺へ参るべきの容姿あきを此よりよろしく頼参らするにと申遣しけ  
 るにぞ上人其旨御承允ありて應て八百屋久兵衛方へ人を遣し右の一件申入れけるゆへお  
 七是を實なりとおもひ茲よおめて此夜へ、ふやく吉祥院へおくと止たりといへども夜も  
 すがら寝もやらせ只管もたゑくるしみ居ける母と杉と多方々相談なし處せんあの跡ならむ  
 吉三郎どのに、これらては生ては居ぬどの蹠蹠まづ、今まをし所とやと吉三どののは寺  
 お居るふんおしてお七を詐、その上上人様ともだんおふおしとつくりと合点のゆくよふ



異見をしたらまんざら得心のゆるぬと有まいと杉と二人が密談して其夜はまづ二人とを打臥しける

④久兵衛お七を油屋へ嫁んとするお七火を付けめしどらるゝ事

油屋武兵衛は吉祥院の狼藉に苛核痛あ逢ひ心に怒りて久兵衛が家よ横冠お七が應答を絶聞と只願迫塞督責すると酷虐けれを久兵衛大いお畏縮一言答ふるとをしらす漸くして道言と既お就れり今些しの塵碍ありぬれば明日は屹と返事なし申べし千里の遠きも漸く一里の近きに及べり津お入つて船を覆へさし甲斐あきとならずや兎角性急たると事の防礙明日は娘妻よも申届采艶應否を申べしと武兵衛をいろく透し宥めて飯らしめれども今さら施すべし手断なく所詮怎も度も打わかし妻娘に悲み見んそのと二人を二階へ誘ひ素々われは素河内の産れ十三の時此家へ丁僕奉公に來り朝夕の御恩に預り年歴るゝ應がつて内外のとははれお任せられ後には久右衛門様の後跡よもと身に餘りし御厚恩夫さへ有るに東道久右衛門どのおもひも寄ぬ御大病瀕死の時の枕下に召れ家業を遺さすは譲り怖れふや自分の妻を家來の我よ娶偶べしと御盃盞まで下されし有がたさ骨身も徹り夫よりして家業を守り一粒一錢も疎にはせせ手足拘拮拮拮とも秋風落葉に資本も消へ用とせして氷の釋るがおどく甚麼して富有の人に便り雨露の恵も得ばやとおもふ所に油屋武兵衛がお七を嫁よ欲しとて若干の黄金を出し尙また變火は其後も這家普請を仕て恩お恩をかけ今は如何とぞ做がたし何とぞ先祖への孝親への孝行とおをひ武兵衛が方へ往て呉れぬを急卒焦眉の磨難となり家を滅し世業をすしさい久兵衛様や久右衛門様を無縁にとる是此の母を女房あがらも我が

御主人看下難儀を見せてと先御二人お義理立す親父の爲よ苦界する娘世間には澤山に有ならひせうぞ得心して油屋へ往て呉と苦話述べし妻と顔舉げ抑貧富の空行雲のおとししたる貧苦に結ばばとて親子中睦くらしてこそ這界お住んだ甲斐をわれ世間の人もたれしらぬ武兵衛が嫁お配より乃索苦界お贖と售れ行末遠ぬは見へてあるお七が奇迫た心から謙ものどが有たらを鬼の餌食も同玄と箇程邪見の其憶でたとへ身上福貴になつたりとて先立靈の悦ばん獲しの心やと覆るとして血の涙止めかねたるをのりあり久兵衛言句の唯もなくお七と泣目の涙をとらい父にむかいてすけるは御父母様に歎きを懸け罪ふかさ此體成るはど油屋へ嫁やしよふといをくとして母の手をとり二階をかい久兵衛と胸かしらす親子の別れ憶あらも己か床臥へ入りけり借夜を更ぬれを七の竊と忍び出証悸胸を両手に抱へ明後日は吉三様故郷へ御飯り明日お迫る這身戀一の夫やなつかしの郎やと狂氣のごとく身を腦り立たれ居たり頼におもひ附火の思案修羅の巷や懸路間二階おつみたる文庫の艸紙に蠟燭の火を刺点せと搔と燃たつ焰の煙り其儘襖にもへうつり表の格子へ焼出れを遽叫こそ火事よと表の騒動久兵衛と愕り轉倒表のとくと走出る引違へて武兵衛は馳入見れば怪敷お七が兎相那厨大膽不敵の女郎犯罪をさつと見届たど小腕とつて挽着をば其手小嚙着咬傷るを上より下へ衝れとせばお七が落る其へうしよ武兵衛も共お眞倒其間に救火の大勢の奔入く防鎮にぞ難あえ放火と鎮れり行老主保赴廻り久兵衛夫婦娘を召呼大いお叱つて申けると去年より兩度の出火眞に耽誤不用心の作行這以後當丁にとさし置がたしと置り怒れを七涙あがらに云けるは今宵の出火とまつたく父母のしるとあらす去年の火事にお寺



へ落行逗留おちりまてうらうの中に憐愛あはれいお方かたは逢あひ染そめてうきしとれもふ甲斐あがひもなく近日きんじつお國くにへお飯いりど  
 の事こと抜ぬけてもかふとおもふにまかせせ跡あとの折をりも火事かじも多おほくお寺てらへ落おつてすれしい御見おんけん今度こんども  
 お寺てらへ落おつるが嬉うれしさをし火ひを放つたら彼かのお方かたお逢あひれうのおもふてしたのが親おやへのお咎とがめ  
 私わたくしが付ついた今度こんどの火外ひがひに科人かじんと座まりませぬ阿鼻あび焦熱せうねつの苦くるしみも露つゆちりほども厭いとねども最も一  
 度いち吉きち三様さんざうへ逢あつて死したぬお顔かほが見みたい爺おやさまや嬢ぢやう々々様さまと猶なほり本の處ところお置おけては看み願ねがはされて下  
 さりませとの自告おんこに皆みな一同いっとうお悲かなしみの泪なみだお火ひをや滅けしぬらん苦爾くるに地ぢも管理おんかの幹官かん渡邊わたべ隼人はやと  
 入來いりれを行老しやうらう主保しゆほ出迎いでむかひ正廳しやうだんへ通とほしいつれを跪かまり今夜中の出火しゅつかの蹠あし蹠あし并ならに久兵衛くべゑ娘むすめ自みづか  
 ら白狀はくじやうの始終しじう逐一しゆじつ申上まをれを隼人はやと申まをけると東西とうざいも辨わまへぬ娘むすめごころ切き々々悲憐ひれんのまどあり今一  
 應者おうしや覆かすべしと御おんちお七しちを呼出よし辨明せんめいおしけるといへ共初ともめにのわらぬお七しちの自告おんこ火ひを附つ  
 たるは私わたくしと謂いふを打消たし消しょう二階にがいの間まをとり仕廻しまひのせつ蠟燭ろうそくの火ひなごにて誤あやつて出火しゅつかとあると  
 儘有まとなり定さだめて左様さやうのとならめと寛宥かんゆうの分説ぶんせつに町役人まちやくじんお七しち親おや々々はいふお及およばす皆みな一ひととふ  
 お頭かぶを下くだげ有難ありがた涙なみだにくれける所へ武兵衛ぶべゑ忽たち俄ま塞出さいしゅつ御役人ごやくじん様さまお女おんなとおはしめしてはひい  
 きの沙汰さた甚ただもつて心得こころえがたしお七しちが火ひを放ついと此武兵衛このぶべゑ屹度いつど見候みまう候まうと語りけれを隼  
 人と打点うちてん肯汝けんにくわしくも知りゑたるものか左ひだりすれむれ七しちが火ひを放つぬ最初さいしゆより知りつらん  
 に其節そのせつは唯見ただみぬふりをあし事の破やぶれお及およんで人を傷やふ大悪だいあく其上官そのじやうかん法管理ほふかんりも憚はらさ出過いでた  
 る荒唐ぼうたう的てき夫おとこれ打居うちゑといふよ疾はやく救火きうか丁てい的てき鐵尺てつせきをもつてしたよかお打耐うちたしけるにどさし  
 その武兵衛ぶべゑ首くびを抱かかへ鼠ねずみのおとくお逃去にげけり隼人はやとと行老しやうらうを近く招まね今武兵衛こんぶべゑが申條まをもあれを  
 此上こゝは私わたくししにこからひつたし重おもく宜よろしく審録しんろくを遂たへしさを飯結いひむすまでと須繁すむらへ入れ置くか





りと竟に細を打縛れど夫婦と歎き伏轉び腸を断れ哀聲しをしといふも空吹風五臓を絞る悲しさも憂も涙もわらくれ武士引立く連飯る

⑩日峯上人お七が助命願ひ上人胡蝶の夢にて悟道を得給ふ事

吉祥院日峯上人の八百屋お七が助命の爲日毎に渡邊隼人が宅へ來り種々に願ひを尽せども王法の式に懸り脱るべしと見へざりしが今日は萬望一許の場所我命にかへても救へんものと普留那の辯舌を闢らし一向に免許の乞を乞索るといふも隼人一圓領承なく上人にむかいていふ夫釋氏は佛法あり政事よと又王法あり今上人のお七を救んと身を棄て乞ひ給ふは人を助くる慈悲善根某しども何ぞ疎意有らんや殊更前後の差別なき小娘子見るに不便と某とても上人又替らねども奈何せん其夜武兵衛が讒訴といひ又鎌倉中に巡技の巡街私罪をかるしめ賄賂を得たりと風評ありては我役職の碍け耳から君への不忠如何にせんされば天下の王法こそ是非もなき事と思し召れよとまかし今一應主官へ申込べきともあれを夫を想みに御待有べし上人の大慈悲善心などや感應なからんやと種々宥めてかへしけり欲し三出尋三那可得三千世界本無窮日峰上人は寒々として寺お飯り權者智識の身のうへも定まる業こそ是非もなき猶も憑て鬼子母神と燈明ふかくさし照らし經音高き磬打ならし今朝よりの勤行に夜もはや初更に至りし頃恍惚ともなく夢ともなく一雙の蝶花園の巡り愛然として飛交ふ風情往了還了翻々顔之頑之左に靡き右に背き網縦の縋り別きて戀ひ露を嘗め花を吸ひ翼を撲鬚を搔し緝々として且戯れ且遊べりとや黄昏の影くらく雌雄の小蝶と四翼を収め花の下へ肌すりおふて宿りけり上人寂々と打觀了實や果敢ものを風蝶の夢

求んと商議なしけるといへども母之深き道に歎き萬望弟吉三郎をとも戻し家督相續なとしめんと種々歎き悲しみけるも親族も打集りて此義は甚低さま吉三郎を呼戻すにとしかじと茲おわめて源次兵衛終お這議に同じ家の臣利倉十内をして江戸駒込吉祥院へ遣し兄源次郎相果候に付名跡相續致させたくこれによつて適頃自由がましく候へ共右申上るごとき安井家相續の義も座候へば甚庶吉三郎は暇の義よろしく聞了願ひ参らすと且些少の至りおがら別幅の通り進獻仕まつる所と色々音物ならびに方金千疋をしてさし出しけるにぞ原來無慾原怒の日峯上人まづ一應十内に會釋の言葉丁且別幅の音を辭して宣ひけるは安井氏の使節事新しき事を仰いものな抑々父は源次兵衛どの吉三郎をして當院へ憑み越され玉ひしと假令ならぬ佛縁をればしめし分られてのとあらずやされを吉三郎おかざりてと他境の弟子のよふにせおもひ侍らば頃日既に學問を長經釋讀誦を出精のとあせと選きに必らず剃髪なましめんとおもひたりし所おれば吉三郎を返し申さんと努々應ひひまじと言まき玉ひけるにぞ十内猶も身を遜たりて申けるは上人の立腹重々の尤と去あがら姉子源次郎息才よて其うへにも吉三郎をとり戻さんと爲を御憤はりも有べきと如何せん家相續なりのたさお付は願ひ申上るとなり強て此儀は聞届け下されたと頼けるにぞ上人又宣ひけると兄弟供する時は出家なましめたらぬ時ととり戻さんとと太だ其意得がたし武家之貴くして佛家と尊からずや何ふん這義とは歸りありてとろしくやさるべしと宣ひけるみぞ十内もたらをたて此上は是非もなし上人は選與なくを某し偷出してつれ歸らんとたがいに闘争止ざりしが卒速に院内諫動して和尙も十内を自己の闘争をやめてまづ勝手へ到



吊むしが後檀林へ入て能化とありしとなり

○下婢お杉

お七が死後に吉三郎を慕ひ種々の態匣ならびお主母お七が戒名を背負ひ遙々江州高島へいたりしに吉三郎といと憐愛お七が相像と運置さ後似合の良夫も出来近々頃まで安井家に目出たかりしとなり

○悪僧辨長

寺を追出されしより乞食となり江戸中を彷徨ひ徘徊けるとなり

○油屋手代惣兵衛

相州箱根の下にて駕籠を昇雲脚仲間と立交りて在けるを見たる人ありしとなり

○油屋武兵衛

元來濕瘡の病有り其うへ吉祥院めて十内に墜れ頭顱の創癒す其上先頃渡邊隼人が属下の的よ手ひどく撲きたる傷にて歩行なりがたく人の勸よてりて但馬へ湯治に行たりし湯毒よ中られ一夜煩惱して翌朝其所にて死したりとなり本郷の名跡も今とはや差少ばりとなりつれどもそれさへしる人も稀なりとぞ

○八百屋久兵衛

妻子を失なふの後濃めて夢の覺たる心地して俄に桑門とあり東家の庵西家陣よ身をよせ漂々徘徊けるが終る所の終る所をしらせどあり呼容齋貪慾れ人を害し身を失なふまど箇のおとし初め日峰上人と女房との逢覆を此とさし喻らば地獄畜生餓鬼修羅道豈只且の悲ひ

と遣さんや

八百屋 於七 胡蝶 夢大尾



明治廿一年二月廿日印刷  
同 年二月廿三日翻刻出版御届

翻刻發行者  
大阪府東區龍造寺町十八番地  
柳澤武運三

編輯兼原版者  
東京芝區烏森町一番地市丸幸太郎方  
長井庄吉

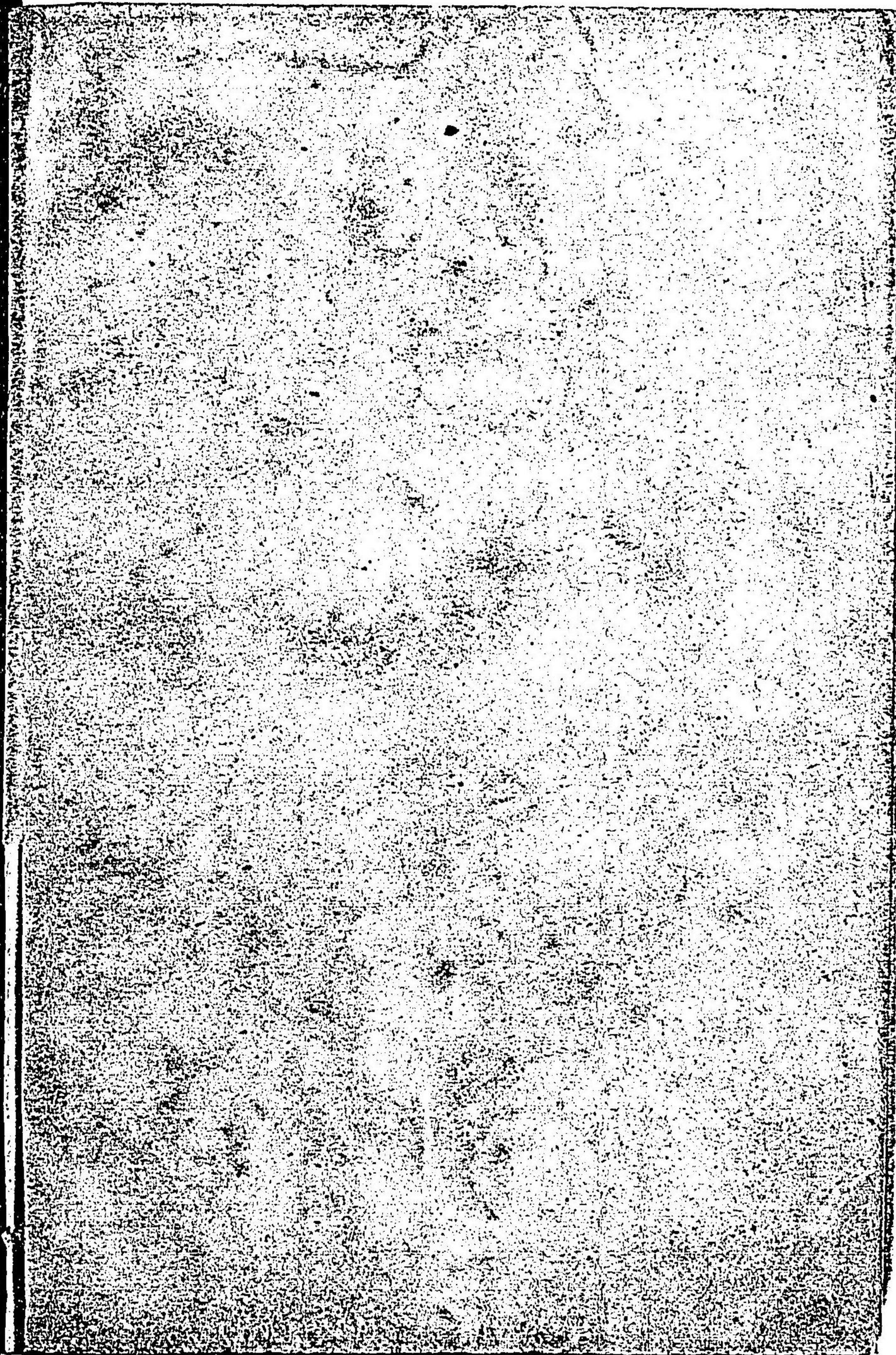
印刷者  
大阪南區長堀橋筋二丁目六番地寄留  
前野茂久次

大阪心齋橋通安堂寺町南へ入  
田中太右衛門

大阪心齋橋通順慶町北へ入  
此村庄助

賣捌書肆









特 12

11

八百屋お七胡蝶夢

091492-000-4

特12-11

八百屋お七胡蝶夢

福老館

M21

DBN-2461

